

2022年4月10日 説教「十字架上の死」

ヨハネの福音書 19章 17~30節

今朝から受難週が始まります。いばらの冠を被らされ、嘲笑を受け、結局十字架刑が決まったイエス・キリスト。

1. 十字架につけられ (17~22)



- ①ゴルゴダ (17~18)「彼らはイエスを受け取った。そして、イエスはご自分で十字架を負って、『どくろの地』という場所（ヘブル語でゴルゴダと言われる）に出て行かれた。彼らはそこでイエスを十字架につけた。イエスといっしょに、ほかのふたりの者をそれぞれ両側に、イエスを真ん中にしてであった。」十字架刑が決まった主イエスは、ドロローサと呼ばれる道を、重い十字架を担いで進みました。その途中で、疲れ切っていたイエスを、クレネ人シモンがともに担ぐ場面もありましたが、ようやくエルサレム郊外にあるどくろの地と呼ばれる所に着きました。ゴルゴダと呼ばれるこの地は、丘の形が頭蓋骨に似ているからとか、そこには頭蓋骨がたくさん埋められているからといった理由から、その名となったと言われます。そこで、キリストは、両手と束ねた両足の三点にくぎを打たれて、十字架上に張り付けられました。二人の犯罪人もいっしょでした。
- ②罪状書き (19~20)「ピラトは罪状書きも書いて、十字架の上に掲げた。それには、『ユダヤ人の王ナザレのイエス』と書いてあった。それで、大ぜいのユダヤ人がこの罪状書きを読んだ。イエスが十字架につけられた場所は都に近かったからである。またそれはヘブル語、ラテン語、ギリシャ語で書いてあった。」ピラトは命じて、十字架の上に、「ユダヤ人の王ナザレの王イエス」と記させました。この刑を見るために、集まった街から来た大勢の人々もこの看板を見ることになりました。それは、ユダヤ人向けにはヘブル語で記され、公用語のギリシャ語、あるいはラテン語でも記されてありました。
- ③ユダヤ人の王 (21~22)「そこで、ユダヤ人の祭司長たちがピラトに、『ユダヤ人の王、と書かないで、彼はユダヤ人の王と自称した、と書いてください。』と言った。ピラトは答えた。『私の書いたことは私が書いたのです。』」しかし、祭司長たちはピラトに、彼はユダヤ人の王ではなく、ユダヤ人の王であると自称しているにすぎないと抗議しました。しかし、ピラトは冷ややかに、地方総督である者が書いたことに文句を言わないでほしいといった調子です。

2. 十字架の周辺 (23~27節)

- ①くじを引き (23~24)「さて、兵士たちは、イエスを十字架につけると、イエスの着物を取り、ひとりの兵士に一つずつあたるよう四分した。また下着をも取ったが、それは上から全部一つに織った、縫い目なしのものであった。そこで彼らは互いに言った。『それは裂かないで、だれの物になるか、くじを引こう。』それは、『彼らはわたしの着物

を分け合い、わたしの下着のためにくじを引いた』という聖書が成就するためであった。」ローマの兵士たちは、十字架につけられ、苦しみの極致にあるイエスの足許で何をしていたのでしょうか。イエスがつけていた着物を四等分したのです。下着の方は一つに織った、縫い目もない大きなものなので、切らずにくじに当たった人の物とすることになったのです。それは詩篇 22:18 の成就でした。

②十字架のそば (25)「兵士たちはこのようなことをしたが、イエスの十字架のそばには、イエスの母と母の姉妹と、クロパの妻のマリヤとマグダラのマリヤが立っていた。」一方、十字架のそばには女性たちが見守っていました。イエスの母マリヤ、クロパの妻マリヤ、それにマグダラのマリヤと三人のマリヤがいたのです。

③愛する弟子 (26~27)「イエスは、母と、そばに立っている愛する弟子とを見て、母に『女の方。そこに、あなたの息子がいます』と言われた。それからその弟子に『そこに、あなたの母がいます。』と言われた。その時から、この弟子は彼女を自分の家に引き取った。」イエスは十字架上から、母マリヤと愛する弟子 (この福音書を記したヨハネと思われま)を見て言われました。「そこにあなたの息子がいる。」とヨハネはマリヤの息子だとし、ヨハネには「あなたの母がいる」と言われています。そんなことから、ヨハネはイエスの母マリヤを自らの家に引き取ったとあります。

3. すべてが完了 (28~30 節)

①わたしは渇く (28)「この後、イエスは、すべてのことが完了したのを知って、聖書が成就するために、『わたしは渇く』と言われた。」十字架刑はローマ時代の極刑と言われます。手足から少しずつ出血し、最後は心臓破裂などで死を迎えると言われます。イエス・キリストの場合は十字架につけられてから、6時間ほどたって命を終えたわけですが、出血が命を維持する限度を越えた時には、体の水分も失われていき、まさに「わたしは渇く」という状態にあったのです。

②酸いぶどう酒 (29)「そこには酸いぶどう酒を含んだ海綿をヒソプの枝につけて、それをイエスの口もとに差し出した。」酸いぶどう酒は痛み止めの役割も果たします。少なくとも一度は、主イエスはこれを口にするのを拒まれて、十字架刑の痛みを全部引き受けられました。今、酸いぶどう酒を海綿に含め、ヒソプという木の枝につけて、口もとに差し出されました。渇いているイエスの口と喉にいさかなりとも潤いがあるようにという配慮から、そのようにされたのでしょう。

③霊をお渡しに (30)「イエスは、酸いぶどう酒を受けられると、『完了した』と言われた。そして、頭をたれて、霊をお渡しになった。」今回はそれを受け入れられました。そして、言われました。「完了した」。主イエスが地上に来られた目的は、神との断絶関係にある人が救わ

れるために、ご自分の命をささげることでした。人の罪の身代わりとなって死ぬことでした。それが救い主の使命でした。その目的が完了したのです。主は頭を垂れ、その霊をいっさい、三位一体なる神にゆだねられたのです。

《結論》

なぜイエス・キリストは十字架にかからなければならなかったかというテーマは、私たち人間が救いの問題を考える時に欠かせません。ここではこのことを考えるために、キリストが十字架上で言われた七つ言葉に注目していきます。

十字架上でのイエス・キリストの言葉。第一には「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからずにいるのです。」(ルカ 23:34)。赦しの極致のお言葉。第二に「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」(ルカ 23:43)。第三に「女の方。そこに、あなたの息子がいます。」「そこに、あなたの母がいます。」(ヨハネ 19:26, 27)。今朝学んだ所。母をヨハネに託しています。第四に「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」(わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。)(マタイ 27:46 など)、第五に「わたしは渇く」(ヨハネ 19:28)。今朝学んだ所です。第六に「完了した」(ヨハネ 19:30)。ここも今朝学んだ所。第七に「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」(ルカ 23:46)。ヨハネの福音書には「霊をお渡しになった」と記されています。

イエス・キリストは余計なことは言われていません。十字架の七つのお言葉の中に、救いの秘密が隠されています。それも、今朝読んできたヨハネの福音書の中に、そのうちの3つがあります。主は十字架上で自らの肉体の苦痛を口に出しておられません。ただ、死の間際に「わたしは渇く」と言われて、死の直前に肉体の訴えをなされています。どこまでも耐え忍ばれて死を迎えられようとしたのです。また、地上での母については、女の方と呼ばれて敬意を払いつつ、ヨハネにマリヤの今後への配慮を伝えていますが、地上的な責任を最後まで果たそうとしておられます。

そして、今朝特に学んでおきたいことは、六番目の「完了した」です。イエス・キリストは生涯、人間の救いを願っておられました。そして、この「完了した」というお言葉のなかに、なんともいえない主の御安堵を感じます。愚かな人間が主のみ思いを想像するのは、傲慢とも思いますが、今回読みましてそう感じました。それはなぜかというと、主の十字架上の死がなければ、人間の救いが始まらないし、福音は福音とならないからです。人間の罪というものは、救われるために、多大な努力や善行や経済的犠牲などがあつたとしても、役に立たないからです。その御業が今、完了したのです。

「いさおなき我を 血をもて贖い、イエス招きたもう、みもとにわれゆく」「たよりゆく者に、救いといのちを、イエス誓いたもう、みもとにわれゆく」(讃美歌271)とありますが、「いさお」とは「功」です。救われるために、功は必要ないのです。キリストが私たちの身代わりとなって十字架上で死んでくださったので、救われる道が開かれたのです。それほどに主は私たちを愛し、憐れんでくださっているのです。私たちができることは、主の招きに応じて、みもとに行くことなのです。この方にゆだねて歩んでゆくことです。そこに救いがあるのです。主の前に出ていきましょう。